



： 卷 頭 言 ：

東京五輪、回転レシーブ、しごく会

—バレーボールと青春—

(公財)日本植物調節剤研究協会 理事長 小川 奎

大学時代のバレー部の仲間から「我々に少なからず情熱をもたらした東京五輪(1964)金メダルの女子バレーボールの決勝戦が、この正月にNHKで放映される」とメールが届いた。

バレー部の同期男6人、女2人は、「しごく会」という同窓会を結成して、友情を温めている。今日では、「しごく」は「いじめ」につながるとして、良い印象を与えないが、本来は「厳しく訓練する」ことである。鬼の大松監督が編み出した回転レシーブを中心とするスパルタ式トレーニングは、まさに「なせばなる」のしごきそのものであるが、この同じ時期に、バレーボールに情熱をぶつけ、互いに高め合った仲間にとっては、「しごく」とは青春の誇りを象徴する。

そして、卒業を前に文集「回転」を創刊した。何故、文集を出そうとしたのか、それは単なる仲の良さだけではない。肝心のバレーボールの方は、懸命に頑張ったにもかかわらず目標に届かなかった無念さと、再度挑戦できない消化不良が残り、その一方、敗者として社会に出てこのまま人生を歩んで良いのかという沸々とした想いが、将来に向かってこの4年間を総括すべきという文集創刊のエネルギーを生んだと思う。その冒頭には「我々の実践により得た求めるべきバレー部と各自の歩む道を、心に溢るる言葉を用いて文章に表わし、一つに集めて、各々のこれからの成長の糧にする」とあり、若者達のほとぼしる情熱が綴り込まれている。

表題の「回転」は回転レシーブに由来するが、名付け親は「回転とは、軸・点を中心にした円運動で、平面的な思考を回転させれば、多様な視点の立体的思考へ飛躍できる。その中心をなす軸・点は、その人の思想や信念である。そして一回転する間に成長した自分を積み重ねていくことが、回転の意である」と解説する。

私自身もバレーボールとの格闘を14,000字に及ぶ文章で総括している。「1年から2年にかけては、上級生に引っ張られる比較的暢気な時期であった。2年の後半から3年になると、レギュラーを目指す甘えの効かない厳しい仲間との競争に曝される。神頼みではなく、自分の道は自らの手で切り開いて行かねばならない。しかし、全力でと覚悟を決めて臨んでも、いわゆる厳しいしごき練習を前に、ややもすると妥協心が働き、自分の弱さに負けがちになる。また、毎日練習をやっても、少しも上手くならないと焦り、悩み葛藤する。練習とは、鍛錬の積み重ねであり、一朝一夕には崩れない確固としたプレイヤーの土台を作るものである。大いに悩みましたが、充実した時期でもあった。

そして、4年が引退した3年の夏合宿からは、チームを牽引する立場となる。まさにその時期が東京五輪と一致する。東洋の魔女の快挙とそれを成し遂げた猛練習に感銘を受けたが、上級生としてチームプレーについても考えるようになる。バレーボールは、一糸乱れぬ息の合ったチームプレーである。自身のプレーはチームプレーを構成し、他のプレーもチームを通して自分のものとなる。チームのためとは、決して自己を殺し捨てることではない。自己を主張し生かすことである。厳しい鍛錬を通して、自己の技量も磨かれ、一つの意味をもつチームの魂も鍛えられる。」

今ではセピア色になった「回転」。そこへ綴った若き日の体験と想いは、その後の人生の大きな糧にもなった。そして、半世紀が過ぎた今日でも、若い仲間とバレーボールを続けている。高齢者も生涯スポーツを楽しむ時代、無理しない省エネプレーでもう少し続けられるかなと思う。